

平和文化研究 第38集 (2017年度)

米国国立公文書館収集資料からみるナガサキ

奥野 正太郎

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

米国国立公文書館収集資料からみるナガサキ

奥野 正太郎

目次

①長崎市が実施した米国国立公文書館での原爆資料の収集事業.....	18
②収集資料の紹介	19

長崎原爆資料館学芸員の奥野です。本日は、アメリカでの資料収集についてお話しします。①長崎市が実施した米国国立公文書館での原爆資料の収集事業について、②収集資料の紹介の2点に論点を絞り話題提供とします。

①長崎市が実施した米国国立公文書館での原爆資料の収集事業

長崎市は被爆70周年事業として平成25年度から今年度の28年度まで、米国国立公文書館で原爆資料調査を実施しました。収集資料は写真資料と映像資料、文書資料です。平成25年度はアメリカ政府の予算凍結により国立公文書館での調査は1日しか行えず、メリーランド大学のプラング文庫の調査を実施しました。したがって実質的に平成26年度から28年度までの3か年調査です。

ワシントンD.Cから電車で1時間ほど、メリーランド州カレッジパークに米国国立公文書館分館があり、写真資料の閲覧フロアが5階にあります【写真1】。日程上、長崎市の職員だけで資料の分布調査、閲覧請求、実地調査など全てを実施するのは難しいため、株式会社ニチマイに委託して資料リストを作成しました。調査はそのリストを基に、ニチマイのリサーチャーに資料請求をお願いし、長崎市チームはひたすら資料を閲覧し複写をするということに専念しました。米国国立公文書館には膨大な数の写真資料が収蔵されています

（2007年時点で空中写真とスチール写真の総数が5000万枚超）。膨大な資料から長崎関係の資料を見つけるための方法をご紹介します。



写真1

閲覧室にあるキャビネットは、小さく仕切られており、その一つ一つを引き出すと個別のカードが出ます【写真2】。そのカードを一枚ずつ見るとJAPAN,NAGASAKIという要領で資料の概要が記載されております【写真3】。このカードに記載されている番号を基にボックス毎に作成されているリスト【写真4】に当たり、該当するボックスがわかるとアーキビストにリクエストし、該当するボックスがカートに乗せられて出されます。この資料の箱から資料を一枚一枚めくって調査をし、必要な資料は調査者自身でスキャンします。現地調

査は、実働 10 日間と限られているため、閲覧している資料が長崎であるかどうかという非常に緩やかな判断基準だけを持ち、とにかく枚数をこなすことを重視しました。総数として 3000 枚近く入手していますが重複も多く、固有の画像はどのくらいあるかということはまだわかっていません。大半の資料の整理がまだ行き届いていないため、来年度から整理を本格的にやるための予算を付けていく方向で検討しています。



写真 2

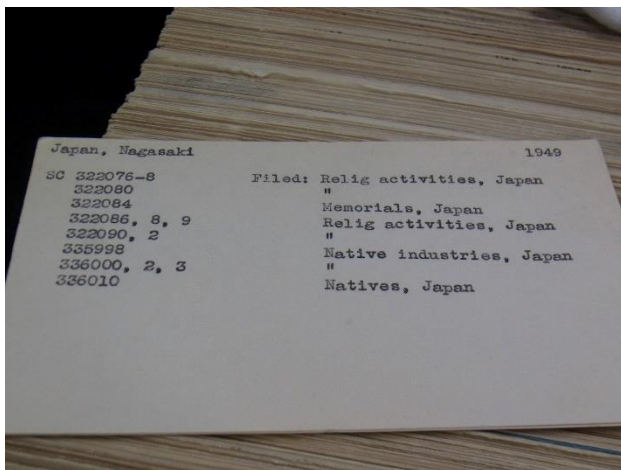


写真 3

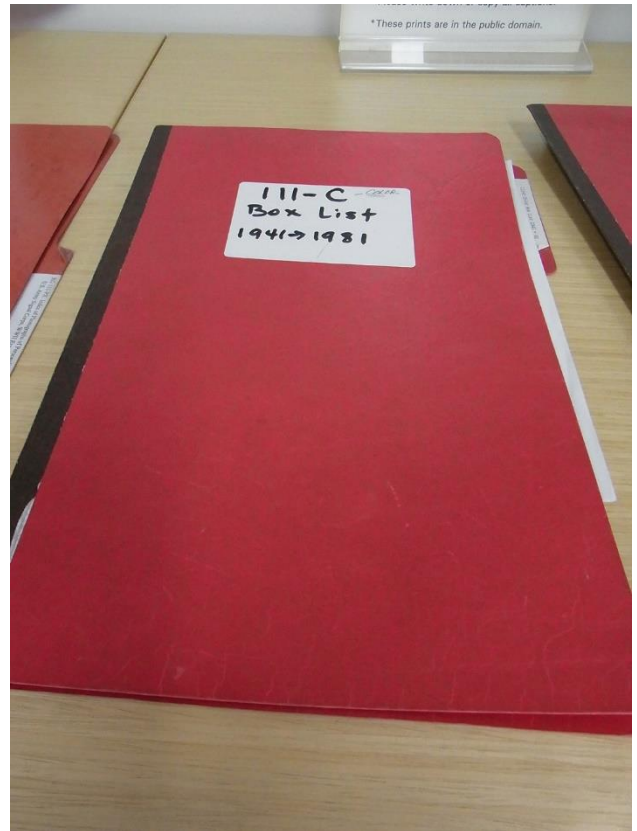


写真 4

②収集資料の紹介

大きく分けて 2 種類のものをご紹介します。1 種類目はトリミングに関するものです。



写真 5



写真6

【写真5】も【写真6】も同じキノコ雲ですが，【写真6】マジックで線が書き込まれており，切り取るラインを示していると考えられます。また，【写真5】は右下に画像のコードが焼きこまれています。

次にご紹介する資料は，【写真7】が原爆資料館で所蔵していた物で【写真8】は新しく集めた物です。

比較すると【写真8】をトリミングして【写真7】の画像が作られたと考えられます。このようにトリミング前の画像を観察することで，以前は不明だった場所・建物・細かな部分がわかるようになります。



写真7



写真8

2種類目に移ります。いわゆる“原爆”という言葉に包含される悲惨さとは少し違う視点のものです。ある夫婦の写真を今から3枚ご紹介します。

まず，資料の形状をご覧ください。1枚の短冊状の台紙の上に写真が添付され，解説がタイプ

されています【写真9】。

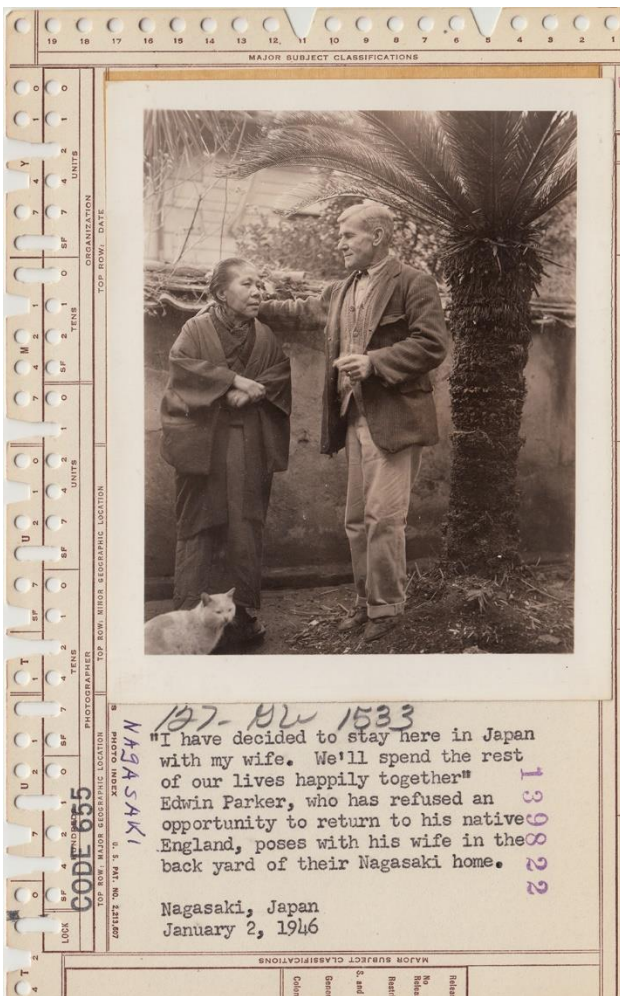


写真 9

資料の余白部を見ると 127GW1533 という文字があります。これは米国国立公文書館の分類番号で、127 という番号からアメリカ海兵隊員が撮影した写真であると読み取れます。通常、コメントの最後に撮影者が記載されていますが、この写真にはありません。撮影場所と時期は「Nagasaki, Japan, January, 1946」とあることから 1946 年、被爆の半年弱の 1 月 2 日に長崎で撮影されたものとされています。

1 枚目【写真 10】は、「私は妻と共に日本に残るということを決めました。私達は余生を幸せに過ごします」とコメントがあります。2 枚目【写真 11】には、「祖国イングランドに戻る機会があったがそれをしなかったエドウィン・パーカーが長崎の家

の裏庭で妻と共にポーズをとっている」と、コメントがあります。最後に【写真 12】は、エドウィン・パーカー夫妻が長崎の家の神棚の前に立っている写真です。「パーカーは 45 年戻っていないイングランドに戻る機会があったが妻と共に日本に残ることを選んだ、エドウィン・パーカー夫妻が長崎原爆で被爆した家に座っている、彼らは余生をここで共に生きていくことにしている」と解説が付けられています。



写真 10



写真 11



写真 12

この写真に違和感を抱きました。長崎市内で撮影されたとありますが、家の中がそれほど破壊されていません。1946年4月に浦上駅の近くでとられた写真が【写真13】です。奥に見える建物や煙突が三菱製鋼所の物であることを考えると、浦上駅付近のバラックが被写体とみられます。この写真のコメントには“patchwork house”という言葉が使われています。民家の様子がつぎはぎだらけの家だということを指しています。キャプションのとおり、パーカー夫妻の写真が1946年1月撮影とすると、被爆から時間が経っています。爆心地に近い場所であればこのようなバラックが一般的だと思います。



写真 13

ここで、原爆写真を調査する際の着眼点を説明します。私を含め被爆体験を持っていない世代でも被爆写真を調べるにはどこを見るべきかという視点で教えていただいた内容です。まず、見るべき重要な情報は地形情報です。具体的には山の稜線や川の有無です。もう一つの重要な情報は、特徴的な構造物があるかどうかです。原爆被爆により木造家屋はかなりの範囲で破壊・焼失しているため、鉄筋コンクリート造の建物の外形に着目します。また、軍需工場の煙突の並び方、配置なども有用です。他にも線路があれば国鉄なのか路面電車なのか、路線図をイメージしつつ、軌道の本数やそれぞれの距離感で撮影位置を知ることができます。また、Google Earthを使って、山の稜線の起伏が見える角度を合わせていくと撮影地を特定できます。

しかし、このような分析手法がパーカー夫妻の写真には適応できませんでした。地形も写っていませんし、他に写っている建物もありません。

改めて写真を注意深く観察してみると、次のようなことがわかります。男性が喫煙者であるとい

うこと、女性は和装、男性の方は洋装であること、神棚がある家で猫を飼っていること、庭にシュロの木があること、指輪を男性も女性も共にしていることです。

解説から読み取れるのは被写体がエドウィン・パーカー夫妻であること、エドウィン氏はイングランドの出身で、45 年ほど祖国に戻っていないこと（1900 年前後から海外生活をしている）、長崎原爆で被爆した家に住んでいること、エドウィン氏はイングランドに戻る機会があったが戻らず妻と共に余生を日本で過ごすことにしたということなどです。

長崎原爆と外国人のつながりを考えると、まず考えうるのが捕虜（当時の呼称「俘虜」）です。香焼の川南造船所や幸町の三菱長崎造船所で労働作業をしていました。ただし、写真では自宅できつろぐ様子が表現されていることから、捕虜ではないと考え、次に居留地関係について考えました。しかし、長崎市が出している長崎原爆戦災誌にはパーカー夫妻に関わりのあるような記載や居留地関係資料は見当たりません。そこでバークガフニ先生の著書、居留地関係の書籍にあたりました。長崎国際墓地に眠る人々のことを書かれている書物を調べていきますとエドウィン・パーカー氏は新坂本国際墓地の 81 番、1951 年 5 月 26 日 68 歳没で、妻はクメ・パーカー氏とわかりました。それで実際現場に行ってみました【写真 14】。

墓碑の正面には英語の記載があり、エドウィン・パーカー氏はイングランドのピーターバラで 1882 年 12 月 24 日生まれ、1951 年 5 月 26 日に亡くなったという内容が記されています（原文：EDWIN PARKER OF PETERSBOROUGH ENGLAND BORN 24 DEC 1882 DIED 26 MAY 1951 AND KUME HIS WIFE）。墓碑の左側面にはエドウィン・パーカーとカタカナで書かれており、右側面には昭和 29 年に 4 月 23 日永眠 パーカー・クメ、忍応恵戒信女と戒名も施されています。



写真 14

墓碑の正面には十字架と RIP という文字があります。これは「安らかに眠ってください」という意味合いです。

シュロの木が植えられ、神棚がある家に住み、和装と洋装の夫婦で、墓碑の正面はキリスト教風、側面には仏教の戒名が刻まれている、非常にユニークな、様々な要素がミックスされていることがわかります。

さて、国立公文書館デジタルアーカイブには被抑留者名簿【写真 15】という資料が掲載されています（請求番号：返青 45010000）。この名簿の兵庫県のキャンプの部分を見ますと、エドウィン・パーカーという文字が入っています【写真 16】。

この被抑留者名簿が作られた 1945 年 8 月末時点で、エドウィン・パーカー氏は兵庫県の再度山の抑留所におられたようです。いつ兵庫県の抑留所に入って長崎に戻られたというのは記載がありませんが、クメ氏の名前はリストにありませんの

で抑留されていないと推察されます。

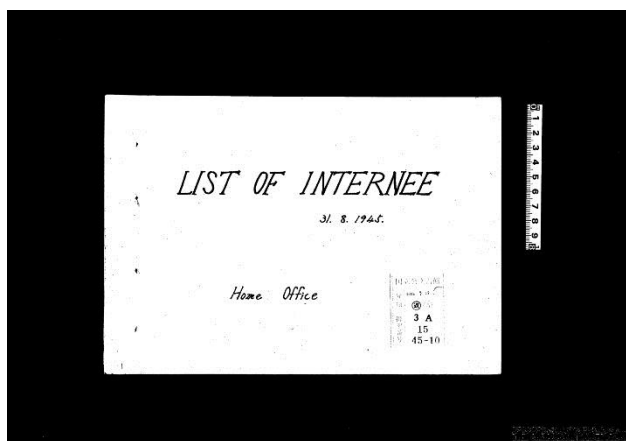


写真 15

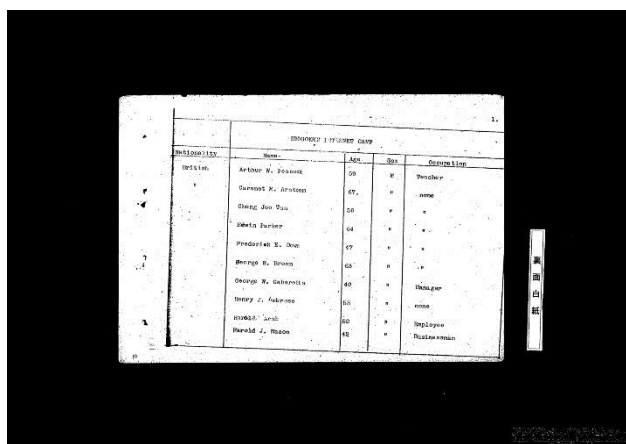


写真 16

この県を平成 26 年に受け入れた博物館実習の学生と一緒に調査をしました。長崎新聞社の記者の方から長崎市内に在住している萩原ツル氏を紹介していただき、学生と一緒に聞き取りに行きました。萩原氏は幼いころからパーカー夫妻と家族ぐるみの付き合いをされていました。萩原氏のご両親も国際結婚で、両親の仲を取り持ったのもパーカー夫妻だとのことでした。聞き取りによると、エドウィン氏は石油関係の仕事でビルマ（現在のミャンマー）に滞在していた時に家のメイドとして働いていたクメ氏と出会って結婚したそうです。二人に子はなく猫を飼っていたということが印象に残っているとのことでした。私はおそらく写真に写っていたあの猫のことだろうと感じました。リタイアしたエドウィン氏はクメ氏の祖国日本で暮

らすことにして大浦町の 29 番地に住んで、戦争が始まる前までは活水に通う学生に英語を教えていたそうです。戦時抑留について、萩原氏のご両親と共に佐賀小城の抑留所におられたためクメ氏がどういう暮らしぶりだったのかわからないとのことでした。そして、戦後割と早い時期に亡くられたのでその思い出もあまり覚えていない。そのようなお話をお聞きすることができました。

雑駁な話になりましたが、米軍は何故この夫妻に、どのようにして辿り着いたのか、なぜこのような写真を撮影したのかといった背景はわかっていません。文献的な資料、例えばショットリストのような物があれば判明しますが、資料の存否もわかりませんし、存在するとすればまだたどり着いていないという状況です。

原爆に被爆した家というキャプションに導かれてこの写真の調査を始めましたが、調べてみるとエドウィン氏は被爆してなかったという事実が明らかになりました。文献に詳しい記述はありませんが、聞き取り調査の中で、外国で出会い国際結婚した夫婦が来日したものの、戦争により抑留という形で別居をせざるを得なくなったこと、しかし戦争が終わり被爆した長崎の街で妻と再会し、現在は夫婦で坂本国際墓地で眠っていることなどが浮かび上がります。

結果として原爆資料調査の本題から逸れましたが、これもまた長崎の戦中戦後の歴史としては重要な、特徴的な歴史ではないかと思っています。市の調査の副次的な産物としてこのような資料に出会うことができました。

このような経験は、「被爆地ナガサキ」という言葉が持つ広がり、大きさ、歴史的な背景を考える契機となりました。被爆都市・長崎市とはいっても、原爆の被害と言えば浦上地区の被害といわれ、確かに原爆の巨大な破壊力は浦上地区で発現しました。でも、NAGASAKI というキーワードで資料を集めていく中で、キリスト教の中心地の浦上地区で落とされた原子爆弾、強大な破壊力によ

り約7万人が亡くなった、という単純なイメージではない様相も包含されていることを感じます。

パーカー夫妻のように、長崎に住んでいた一人ひとりに注目すると、一般的な原爆イメージでは収まらない多様な状況の中での生活を知ることができます。原爆被爆による悲惨な状況、悲劇的な経験を調査するなかで、それとは異なるものの資料に残されている長崎の持つ様々な姿をお伝えするのも大事な仕事だと思っています。

昭和期の浦上地区の変遷は、被爆に関する歴史を調べる上で重要であるため、原爆資料館として資料・知見の蓄積があります。爆心地である松山町がどのような場所から発展してきたのか、原爆が投下された状況、現在に至るまでの経過などは理解が深まってきています。しかしながら、長崎駅よりも南の地区は原爆の被害が爆心地付近に比べると凄惨さが薄いため、調査における主要地点ではないことから資料の残存状況が悪く、理解が進んでいない状況にあります。地区の歴史として伝えられている出来事と原爆関係で語られる歴史がつながっていないこともあります。資料を調べるなかで従来知られていないことが明らかになると、改めて長崎という街自体が持っている歴史的なコンテキストの複雑さを感じますし、だからこそ研究における魅力にもつながっていると思います。